

笹川記念保健協力財団 日中交流事業  
中国医科大学での内分泌代謝内科学交流報告書

山口大学大学院医学系研究科病態制御内科学  
教授 谷澤幸生

2010年11月24日より27日まで中国瀋陽市、中国医科大学附属盛京病院を訪問し、糖尿病学についての講演、および意見交換を行った。

11月24日、羽田空港より北京経由で、夕刻、瀋陽市桃仙国際空港に降り立った。中国医科大学附属盛京病院内分泌内科 劉聡教授、中国医科大学国際交流担当、王琛さんの出迎えを受け、車で約30分の瀋陽市中心部にあるホテルへと向かった。チェックインの後、劉聡教授と約10年ぶりの再会に、夕食をごちそうになりながら、当時を懐かしみ、また、お互いの近況を報告して歓談した。

翌25日は、盛京病院（滑翔キャンパス）を訪問し、第2内分泌内科、李玲教授、劉聡教授をはじめとするスタッフ、看護師、医学生、並びに、笹川記念保健協力財団の支援による、遼寧省朝陽市第2病院からの研修生、王海英医師らと糖尿病治療について、また、研究について意見交換を行った。中国でも糖尿病患者が著増しており、肥満の増加と関連しているとの話は、日本と同様で興味深かった。2型糖尿病の薬物治療については、メトホルミンが第1選択で、欧米では一般的で、最近日本でも承認された高用量メトホルミンが第1選択であるとのことであった。



心血管イベントの増加が問題となったチアゾリジン薬はもはや処方されなくなり、また、昨年、癌との関連を懸念する論文発表があったインスリンアナログ、グラルギンもほとんど処方されない様で、欧米の影響を強く受けている印象を持った。糖尿病は、日本人と中国人では近い病態を持つことが考えられるが、共通の遺伝素因の解明に向けての共同研究の可能性についても討論した。

懇談に引き続き、「**Beta-cell death in Wolfram Syndrome and type 2 diabetes mellitus**」のタイトルでセミナーを行った。**Wolfram Syndrome**は、若年発症のインスリン欠乏型糖尿病と視神経萎縮を主徴とするまれな遺伝性疾患であるが、患者では、膵β細胞が選択的に消失するために糖尿病を発症する。私たちが同定した原因遺伝子、*WFS1*の機能と、その欠損による疾患発症メカニズムについての研究成果を紹介した。また、*WFS1*遺伝子は2型糖尿病遺伝子であることも紹介したところ、大変興味を持たれ、医師はもちろん、セミナーに参加していた医学生からもいろいろな質問を受け、活発な会となった。参加していた医師からは、当時はそうとは認識していなかったが、**Wolfram Syndrome**であった可能性の高い患者を経験したことも披露された。



夜は、中国医科大学国際交流部門の主催による夕食会を開催していただき、担当責任者である潘伯臣教授をはじめ、劉教授、李教授らと懇談した。潘伯臣教授は産婦人科がご専門であるが、ご自身も日本に留学した経験がおありである。長い日中の交流の歴史を感じた。国際交流センターの日本担当スタッフのみなさんは日本語が流暢であった。中でも、劉佳さんは20代と思われたが、とても日本語が流暢であったため経歴を尋ねると、九州大学に留学し、学部、大学院修士課程を修了して帰国し、国際交流センターにしばらく前に採用されたとのことで、ここでも日本とのつながりの深さを実感した。

26日は早朝から、盛京病院（南湖キャンパス）を見学した。約4000床のベッドを有する、建築後間もない近代的な病院で、外来患者も多く、活気にあふれていた。内分泌内科主任教授、韓萍教授と懇談した後、病院内の諸施設を見学した。近代的な医療機器が備わっており、特に外国人、VIPのための外来は待合室も含めて広いスペースに高いアメニティーを備えたものであった。

その後、中国医科大学メインキャンパス、および第1病院を見学した。医学部が存在するメインキャンパスには、満州医科大学当時の建物も現存し、しっかりした煉瓦造りと狭い廊下に歴史を感じた。第1病院も2200床余りを有



する巨大な病院である。内分泌研究室は比較的古い建物にあったが、最近改修され、内部は新しい建物と遜色ないものであった。主に甲状腺疾患についての研究がされているようで、何台ものフリーザーに数千の患者検体が保管されていた。臨床検査から、最新の分子生物学的研究まで行える分析機器、研究機器もよく備わっていた。

午後は近くのホテルで日中糖尿病討論会が開催され、中国医科大学附属盛京病院内分泌科主任 韓萍教授の司会で、私が「Pathophysiology-based Type 2 Diabetes Treatment -Concept and Practice in Japan」のタイトルで講演を行った。日本人、中国人をはじめとする東アジア人の糖尿病の病態生理学的特徴を解説し、日本での2型糖尿病薬物療法の現状について紹介した。日本での糖尿病治療がいかに行われているか、関心が高く、多くの質問を頂いた。私の講演に続いて、中国医科大学附属盛京病院第2内分泌内科主任教授 李玲教授から、「2型糖尿病のインスリン治療」の講演があった。日本ではインスリンアナログの使用が一般的となっているが、中国では保険の制約によりアナログは使いづらい状況にあるとのことであった。100 数十名の参加者を得て活発な会となった。

11月の瀋陽はすでに冬で、日中でも氷点下の気温であった。25日、26日は晴天の冷たい冬の日であったが、26日夜から27日未明にかけて少し雪が降ったようで、27日は道路や屋根がうっすらと雪化粧をしていた。27日早朝、劉教授、王さんにホテルから空港へと再び案内していただき、瀋陽桃仙国際空港から関西空港に向けて帰途についた。慌ただしい旅であったが、中国の友との親交を深め、中国東北地方と日本との深いつながりを再確認することができた。

2010年12月5日記